

かえり道 さそい道

前任からの法座お誘い状 第4号

●二つろの巡礼じゆんれい

(あなたは)

自分が見たいものを見るのではなく、
見なくてはならないものを見るのよ

村上春樹

※長い題名の小説『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』にあったひと言です。

※ここにある見るを、知るに置きかえてみました。

※あなたは自分が知りたいものを知るのではなく、
知らなくてはならないものを知るのよ…。こう書
けばお寺の法座のお誘い状にピッタリです。

※あなたは自分が聞きたいものを聞くのではなく、
聞かなくてはならないものを聞くのよ…。とした
ら、さらにピッタリします。

●如是我聞にようぜがもん

※如是我聞(私はこのように聞きました)、経典
はこの言葉ではじまります。それは単に耳を傾け
たということではなく、「人と生まれてかならず
聞かなくてはならないもの」を聞きました、との
深い意味を表したものでないでしょうか。たと
え私にとってどんなに不都合なことであっても。

●巡礼聞法五十三次じゆんれいもんぼう

※江戸の日本橋から京都の三条大橋をつなぐ東海
道五十三次、その多彩な五十三の宿場町は、歌川
広重の浮世絵『東海道五十三次』に描かれ、弥次
喜多道中の舞台ともなりました。

※実はこの五十三の宿場町の由来は、『華嚴経』
の善財童子ぜんさいどうじの物語から発案されました。仏教に目
覚めた善財童子が五十三人の師を訪ねて巡礼する
旅がもたになっています。

※経は、老人も子供も遊女に身をやつした人でさ
え師と仰ぐ善財童子の巡礼聞法の姿を描きます。

※童子の巡礼の姿は、光も影も幸も不幸もプラス
もマイナスもすべてが教えに遇う尊いご縁であつ
たことを示すものでした。

●涼しさや

※五十歳を過ぎてはじめて子宝に恵まれた小林一
茶、その子を幼くして次々になくします。仕合しあわ
せの絶頂から不仕合ふしあわせのどん底につき落とされ
た一茶は、

露つゆの世は露つゆの世ながらさりながら

と悲泣します。…が、どんなに嘆いても嘆きは救
いとはなりませんでした。

※やがて

涼すずしさや弥陀成仏みだじょうぶつのこのかたは

と句を遺のこします。人生の悲喜苦楽が聞法の縁とな
ったとき、一茶のこころの巡礼は終着します。悲
喜をこえた涼すずやかなお念仏との出遇いとして…。

※残暑厳しい中の法座ですが、是非お誘いあわせ
てお参りください。

(平成二十九年 歡喜会法要 前任職)